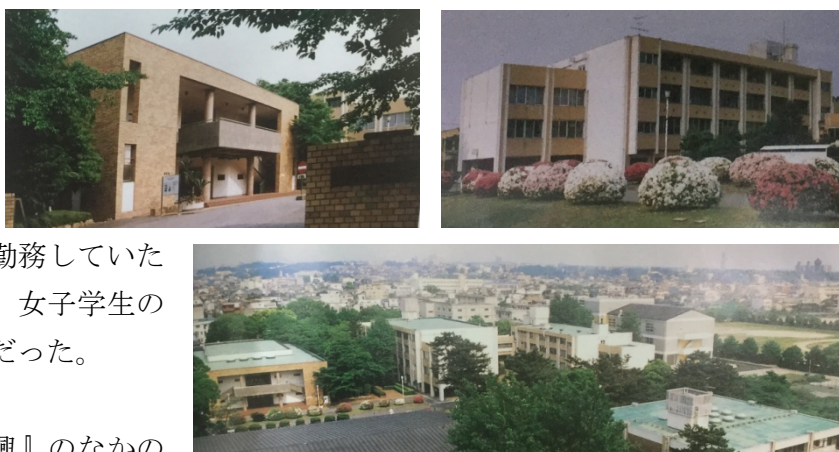


旧軍用地と「千種地区」

「千種地区」の旧軍用地転用については、いろいろと思い出がある。まずは、小学生の頃。千種区千種本町の「国鉄官舎」から高見町「国鉄アパート」に引っ越して、高見小学校に転校した。高見町の自宅近くに、今から思えば旧軍用地跡の土管などが転がる空き地があり、そこで遊んだ記憶が残る。

もう一つは、名古屋市立女子短大に就職し、18年にわたり勤めた。写真は『名古屋市立女子短大50年誌』から。門の左は図書館と講堂。講義管理棟4階が研究室。短大の南に、名工大のグラウンドがあり、さらに行くと千種公園がある。その一帯は旧軍用地跡であり、歴史を感じさせる土地であった。勤務していた頃は、そんな歴史より、女子学生の教育のことで頭が一杯だった。



『旧軍用地と戦後復興』のなかの名古屋の事例の3回目として「千種地区」をとりあげたい。

戦災復興計画においては、千種地区全域が千種公園(約40ヘクタール)として計画決定された。千種地区の周辺は土地区画整理事業によって既に住宅市街地化しており、市北東部の基幹的な大規模公園として計画された。

一方、名古屋兵器補給廠跡地には、旧軍建物を校舎に転用するという国の方針に従い、1946年に愛知県立工業専門学校(現名古屋工業大学)、1947年に名古屋女子商業学校(現名古屋経済大学市邨高校)が移転してきた。両校とも罹災し、代替校舎として残存倉庫に目を付けたのであった。当初、こうした利用は一時的なはずであったが、新たな移転用地確保が困難なことから、利用継続を認めざるを得なくなっていった。



加えて、1949年に制定された国家公務員宿舎法を受けての公務員宿舎建設や、周辺の市街化に伴う病院や学校の需要増加に対応する必要が生じ、千種公園は1954年に5.8ヘクタールにまで縮小され、公園から削除された区域は、上記の用途に転用されていた。しかし、名古屋城地区の官庁街のように計画的な転用がなされたわけではなく、施設配置の調整が十分になされないまま、各都市施設の整備主体である国、県、市によって部分的な転用が個別になされたため、様々な都市施設がばらばらに立地した。そのため、例えば公務員宿舎は、千種地区のあちらこちらに散在する結果となった。

また、当初は全域が公園区域であったために、復興土地区画整理事業の施行区域とならず、公園区域除外後も名古屋造兵廠千種製造所跡地(但し、千種公園は除く)だけが復興土地区画整理事業区域となり、既に名古屋工業大学や市邨学園などの学校に利用されていた区域が多かった名古屋兵器補給廠跡地は、復興土地区画整理事業区域から除外されたままであった。そのため、名古屋兵器補給廠跡地には、軍事施設時代の構内道路や水路をそのまま利用したと思われる道路も見られ、結果的に不整形な街区となっている部分もある。

千種地区は、中・高・大・聾学校といった様々な学校や、公務員宿舎、市営住宅が集積し、千種公園、東市民病院を擁する文教・住宅市街地となった。しかし、それは計画的な転用によるものとは言い難い。それでも周辺の街区と比べれば分かるように、比較的ゆとりのある文教・住宅市街地が形成されたのは、一部を除き、殆どが国、県、市といった公的機関や、民間であっても学校法人による利用であり、敷地の細分化や効率至上の土地利用を免れたためであろう。

こうした指摘を参考にして、千種公園から名古屋市立女子短大(現在は名古屋市立大芸術工学部)あたりを歩いてみたくなった。なんだか短大時代が懐かしく思い出される。若き時代の「思い出」などをレポートに綴りたい。

(2017年8月22日)